



中記作令欠 又关, 说明余和欠的讀音相近。過去研究者們一般都認為令欠的第二原字是𠂔, 這可能是因爲受到“度”的近代音 tu 干擾所導致的誤解。我們與各種資料反復核對後, 得知表示“度”的契丹字的第二原字爲欠, 並非𠂔。漢字“度”的語音變化有兩種。

(1) 上古音: da3 中古音: du3 近代音 tu4

(2) 上古音: dak4 中古音: dak4 近代音: tɔ2 或 tau2

“度”的中古音有 du3 和 dak4 兩種, 契丹字令欠的讀音可能與後一種語音形式對應。因此, 欠可能包含 k 輔音, 余和余的讀音也都包含 k 輔音

(27-28 頁)

中村: 引用文によると吳氏は欠と余と余が子音 k を含むとします(欠可能包含 k 輔音, 余和余的讀音也都包含 k 輔音)。前回の対談の注 10 で言及されたことですが<sup>3</sup>、吳氏の子音 k は、どのような子音対立を想定した上での表記であるかということ、混乱を避けるために確認しておきませんか。

吉池: 引用する諸論文の立場の異なりに応じて表記も異なると、混乱のもととなりますね。吳氏の立場はわかりません。わかりませんが、契丹語の破裂音と破擦音は、漢語中古音が三項の対立(有声音 g、無声無氣音 k、無声有氣音 k<sup>h</sup>)であったのは異なり、二項の対立ですから、それがどのような立場であれ、表記法としては、b,d,g,d<sub>ʒ</sub> と p,t,k,t<sub>ʃ</sub> とするか、p,t,k,t<sub>ʃ</sub> と p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>,t<sup>ʃh</sup> とするか<sup>4</sup>、いずれかでしょう。そこで、吳氏の k はどちらの k なのかという

<sup>3</sup> 契丹語の破裂音と破擦音がどのような音によって対立していたかという点について、三つの立場がある。[t] を例とすると、

① 強音と弱音の対立とする立場。強音は発音器官の緊張。音声としては主に [t<sup>h</sup>] など。弱音は発音器官の弛緩。音声としては [t~d̥~d] など。

② 清濁の対立とする立場。清音(無声音) [t] と濁音(有声音) [d]。

③ 氣音の有無による対立とする立場。無声有氣 [t<sup>h</sup>] と無声無氣 [t]。無氣音は、氣音さえ無ければ良いので、前後の環境により [t] (無声) ~ [d̥] (半有聲) ~ [d] (有聲) という揺れ幅がある。

<sup>4</sup> 中國社會科學院民族研究所・內蒙古大學蒙古語文研究室契丹文字研究小組(1977) (『關於契丹小字研究』內蒙古大學學報契丹小字研究專號 1977 (4)。陳乃雄・包聯群(2001) 『契丹小字研究論文選編』呼和浩特: 內蒙古人民出版社, 149-309 頁所収) は、𠂔 p 𠂔 ta 𠂔 k 子 t<sub>ʃ</sub> と 𠂔 p' o 𠂔 t' au 𠂔 k' 𠂔 t<sub>ʃh</sub> のように、p,t,k,t<sub>ʃ</sub> と p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>,t<sub>ʃh</sub> で表記する。愛新覺羅 烏拉熙春(2004) (『契丹語言文字研究』京都: 東亞歷史文化研究會) は、𠂔 bo/b 𠂔 da 𠂔 g 𠂔 d<sub>ʒa</sub> (子は s) と 𠂔 po 𠂔 tau/ta 𠂔 ku (𠂔は q/qa) 𠂔 t<sub>ʃ</sub>/d<sub>ʒ</sub> のように、b,d,g,d<sub>ʒ</sub> と p,t,k(q),t<sub>ʃ</sub> で表記する。両者の表記は契丹語破裂音破擦音の二項の対立を反映している。これに対して、清格爾泰(2010) (『契丹小字釋讀問題』(修訂本) 『清格爾泰文集 5』赤峰: 內蒙古出版集團・內蒙古科學技術出版社, 371-621 頁。清格爾泰(2002) 『契丹小字釋讀問題』東京: AA 研を再録したもの。原字音価の部分には大幅な増補がある。) は、𠂔 p 𠂔 ta 𠂔 k 子 t<sub>ʃ</sub>~t<sub>ʃu</sub> と 𠂔 p' o 𠂔 t' au 𠂔 k' 𠂔 t<sub>ʃ</sub>,t<sub>ʃh</sub> と 𠂔 ba 𠂔 dol 𠂔 g,gu 𠂔 u<sub>ʃ</sub>~u<sub>ʒ</sub> のように、p,t,k,t<sub>ʃ</sub> と p<sup>h</sup>,t<sup>h</sup>,k<sup>h</sup>,t<sub>ʃh</sub> と b,d,g,d<sub>ʒ</sub> で表記する。清格爾泰(2002) と(2010)は、表記の体系よりも過去の研究成果の集積という面を重視したものとなっている。これをそのまま引用すると議論は混乱したものとなる。

ことですね。

中村：漢語の入声韻尾 **k** を、契丹話者がどのように取り入れ契丹漢字音として定着させたかということが問題になります。中古漢語の入声韻尾の音質を現代方言から類推することが許されるならば内破音でしょう。他方、契丹語の音節末子音の音質はわかりませんが、モンゴル語ハルハ方言やチャハル方言から類推することが許されるならば外破音でしょう。契丹語話者が、漢語の内破音を聞いてどのように受け取るか簡単な話ではありません。しかし、これまでの対談によるかぎり、崇祿大夫の祿 **𐰺𐰽** および僕射の僕 **𐰺𐰽** の **𐰽** が、契丹語人名において **𐰽** (借用漢語の見母の表記に常用される) と交代することから、また博州の博 **𐰺𐰽** の **𐰽** が、契丹語の漢字訳語において古 (漢語の見母) で表記されることから、**b,d,g,dʒ** と **p,t,k,ʃ** という対立とした場合の **g** で、**p,t,k,ʃ** と **pʰ,tʰ,kʰ,ʃʰ** という対立とした場合の **k** で表記されるとしてよいのでしょうか。そうであるならば、呉氏が述べる入声韻尾の **k** も、**p,t,k,ʃ** と **pʰ,tʰ,kʰ,ʃʰ** という対立における前者の **k** と見なすことができます。この **k** は、研究者によっては **g** と表記されるので注意が必要です。

吉池：これまでの対談でも、折に触れて“**k** (又は **g**)”などと括弧を付して注意を促しました。これ以後も同様に括弧で注記を付します。もともと、**b,d,g,dʒ** と表記する場合は混同する恐れがないので注記は付しません。

中村：それでは本題にもどりましょう。引用文中の「契丹文研究小組」とは『契丹小字研究』(1985)<sup>5</sup> に繋がる研究グループのことですね。『契丹小字研究』(1985)は、開国伯の伯 (中古音 **pek**, 近代音 **pai**) を **𐰺** で表記し、冊文の冊 (中古音 **ʃæk**, 近代音 **tʃhai**) を **𐰽** で表記することを根拠として、**𐰺** と **𐰽** を **ai** としました。それに対して呉英喆(2007)は、これらの伯や冊が漢語中古音の入声韻尾に対応することから、破裂音 **k** (又は **g**) 等を想定する余地も残されているとするわけですね。

この議論について検討する前に、検討の対象となる伯と冊の契丹小字の表記のうち、冊の表記が正しいか否か確認しましょう。冊文の冊が **𐰺𐰽** ではなく **𐰺𐰽** であるということについては、第2回目対談の吉池孝一・中村雅之(2020b)<sup>6</sup> で議論しましたね。繰り返しになりますが、もう一度確認しましょう。

---

なお、ここでは諸文献の表記法を問題にした。これらの表記が契丹語音の表記として適切であるか否かは別に議論しなければならない。例えば、**b,d,g,dʒ** と **p,t,k,ʃ**、**p,t,k,ʃ** と **pʰ,tʰ,kʰ,ʃʰ** のそれぞれの後者の **k** と **kʰ** は、破裂音ではなく摩擦音であったという議論もある。摩擦音であるという点については、吉池孝一(2020) (「契丹文字談義 —契丹語“虎斯”(力)について—」『KOTONOHA』210: 26-36 頁) において議論の経緯を研究史として述べた。



<sup>5</sup> 清格爾泰・劉鳳翥ほか(1985)『契丹小字研究』北京：中國社會科學出版社。

<sup>6</sup> 吉池孝一・中村雅之(2020b)「漢語近世音と契丹文字漢字音(2) —契丹小字の入声表記、-t/-kの有無—」『KOTONOHA』210、1-16 頁。

### 册文の册は𠄎

吉池：劉浦江・康鵬(2014)<sup>7</sup>の語彙索引に拠ると、𠄎余-𠄎𠄎に册文を対応させるのは、道宗皇帝哀册篆蓋6行目と本文1行目、宣懿皇后哀册篆蓋4行目と本文6行目の4例です。しかし、𠄎余の余の字形が、余であるかそれとも𠄎であるかについては幾つかの見方があります。拓本で原字の字形を確認し、それに対する三種の見方を表示すると次のとおりです。

石刻文名	篆蓋銘文 の原字	哀册本文の 原字	『契丹小字研究』 (1985)の翻字	即實(2012) の翻字	劉鳳翥(2014) の翻字
道宗皇帝 哀册 1101年	 6行目	 行書 1行目	篆蓋余 本文余	篆蓋余 本文𠄎	篆蓋𠄎 本文𠄎
宣懿皇后 哀册 1101年	 4行目	 行書 6行目	篆蓋余 本文余	篆蓋余 本文𠄎	篆蓋𠄎 本文𠄎
皇太叔祖 哀册 1110年	 3行目	 楷書 右が当該の原字 1行目	篆蓋ナシ 本文ナシ 『契丹小字研究』(1985) 出版後の1997年の出土	篆蓋𠄎 本文𠄎	篆蓋𠄎 本文𠄎

本文の原字は行書風に書かれているので字形の同定は困難ですが、『契丹小字研究』(1985)は対応する篆蓋の篆書の字形に拠って余と翻字しました。その後、皇太叔祖哀册が出土しました。皇太叔祖哀册によると篆書も本文の楷書も明らかに𠄎です。皇太叔祖哀册の出土(1997年)を契機として、これまでの字形の同定について反省が加えられました。即實(2012)<sup>8</sup>は、余と𠄎は異体字とします<sup>9</sup>。劉鳳翥(2014)は、𠄎余は誤りで𠄎余が正しいとし<sup>10</sup>、篆蓋銘文のも𠄎と翻字したわけですが、その根拠は明示しません。

中村：漢字の篆書の字形を根拠とし得るということでしたね。

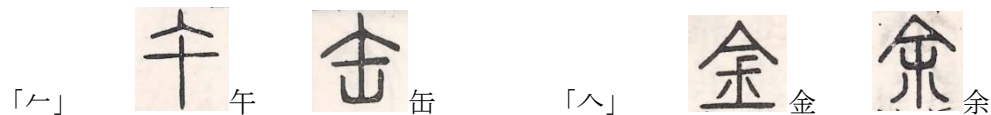
<sup>7</sup> 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

<sup>8</sup> 即實(2012)『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社。

<sup>9</sup> 「抄本(『契丹小字資料彙輯』：対談者注記)之余，拓本作𠄎。據册蓋篆書還楷須作余。由此可知，余 𠄎 是異體同字。」(《道宗哀册》校勘記766頁)。

<sup>10</sup> 劉鳳翥編著(2014)第二册「契丹小字《道宗皇帝哀册》和《宣懿皇后哀册》是行書體，規範爲楷體字有一定的難度。二十世紀七十年代，契丹文字研究小組把契丹小字「哀册」和「册文」的「册」規範爲𠄎余。由於契丹小字《皇太叔祖哀册》的出土和發表，使我們得知規範爲𠄎余是不對的，契丹小字「哀册」的「册」爲𠄎余。」487頁。

吉池：ええ。いま漢字楷書の「ㄥ」と「ㄥ」に対応する小篆を宋・徐鍇撰『説文解字徐氏繫傳四十卷』<sup>11</sup>の影印で確認すると次のとおりです。



「ㄥ」の小篆は屋根の最上部が突き出ており屋根も丸みを帯びています。「ㄥ」の最上部は突き出ることがなく屋根は直線的です。これによると、契丹小字𠬞の篆書体は漢字の小篆に拠ったものと見て良いのでしょうか。𠬞の屋根の部分は、𠬞の「ㄥ」を漢字の小篆に拠って篆書化したもので、「ㄥ」の篆書ではありません。この議論が正しいとしたら、𠬞と𠬞を異体字とする即實(2012)は誤りということになります。

中村：以上が吉池孝一・中村雅之(2020b)の議論ですが、これによると、『契丹小字研究』(1985)や呉英喆(2007)で𠬞余册とするのは𠬞余册の誤認であり、𠬞と𠬞は異なる原字として区別する必要があります。𠬞と𠬞の音も異なっていたという前提に立つ必要があります。𠬞と𠬞の音のうち、𠬞については入声韻尾 k に相当するものは無いということも、3 回目対談の吉池孝一・中村雅之(2020c)<sup>12</sup>で確認しましたね。

### 𠬞の音

吉池：𠬞余册について、愛新覺羅 烏拉熙春(2004)<sup>13</sup>は、博州防禦使墓誌銘(金・大定 10 年(1170)、1993 年出土)の𠬞余𠬞余𠬞(14 行目)を、𠬞余(漢字音「牌」)-𠬞余(漢字音「子」)𠬞(契丹語の複数接辞)と読みます。牌(中古音 bāi > 近世音 p<sup>h</sup>ai)<sup>14</sup>を𠬞余で表記するので、𠬞に入声韻尾に相当する破裂音は含まれない。𠬞で表記される𠬞余册に入声韻尾-k は無く、𠬞 ai とするということでした。

中村：𠬞余-𠬞余を牌子と読むのは、烏拉熙春(2004)のみのようです。清格爾泰(2002)<sup>15</sup>、即實(2012)<sup>16</sup>、劉鳳翥(2014)<sup>17</sup>は未読のままです。例も博州防禦使墓誌銘の𠬞余-𠬞余(牌子)の 1 例のみで、やや心許無いのですが、牌子と読んでも不都合は生じないようです。現在の

<sup>11</sup> 『説文繫傳(一)(二)』臺北：華文書局 1971 年、清道光十九年祁刻本影印。

<sup>12</sup> 吉池孝一、中村雅之(2020c)「漢語近世音と契丹文字漢字音(3) — 契丹小字の入声表記、僕・祿の韻尾 —」、『KOTONOHA』211、31-40 頁。

<sup>13</sup> 愛新覺羅 烏拉熙春(2004)「遼代漢語無入声考」『立命館言語文化研究』16(1)、121-141 頁。130 頁参照。

<sup>14</sup> この漢字音は藤堂明保(1978)による。

<sup>15</sup> 清格爾泰(2002)『契丹小字釋讀問題』東京外国語大学 A.A. 研。

<sup>16</sup> 即實(2012)『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社。

<sup>17</sup> 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局。

ところはこれを根拠として **𡗗 ai** とする、ということでしたね。

いずれにしても、入声字との対応のみによって入声韻尾の有無を決定することはできません。入声字以外にどのような資料に拠るかがポイントです。**𡗗 ai** の場合は **𡗗𡗗-𡗗𡗗** (牌子) に拠りました。そのあたりに注目して呉英喆(2007)の議論を検討しましょう。

吉池：呉英喆(2007)は、**𡗗**と**𡗗**と**𡗗**に **k** などの破裂音を含むことを想定するわけですが、そのうち、上に述べたように **𡗗**は除くことができるので、これより**𡗗**と**𡗗**の音と入声韻尾との関係を検討しましょう。

### 度使の度 一韻尾の有無

吉池：呉英喆(2007)は、度使は**𡗗𡗗-𡗗𡗗**もしくは**𡗗𡗗-𡗗𡗗**と表記されるので、**𡗗**と**𡗗**は近似音であるとし、また、契丹語の漢字訳語を根拠として、**𡗗**が **k** (又は **g**) などの破裂音を含むとし、これによって度使の度は入声韻尾 **k** を持っていたとします。

ところで、度使は節度使の省略とされますが<sup>18</sup>、度の中古音に去声と入声の両音があることは呉英喆(2007)の引用文のとおりです。「度(法度 去声)を節(管理)する使(官)」の度は、去声由来であろうと思い込んでいたのですが<sup>19</sup>、呉英喆(2007)によると入声ということになるわけですね。

中村：語構成からみて去声にみえる度がどのような経緯で入声として読まれたかはともかくとして、**𡗗**に **k** (又は **g**) が認められるならば、度使の度は入声韻尾を持つ音形で読まれたということになりますね。

いずれにしても、**𡗗𡗗**および**𡗗𡗗**の**𡗗**と**𡗗**の音が問題となります。呉英喆(2007)では、**𡗗𡗗-𡗗𡗗**度使、**𡗗𡗗-𡗗𡗗**度使とする出典が示されないので、先ず劉浦江・康鵬(2014)<sup>20</sup>の語彙索引に拠って資料の出典と数量などを確認しましょう。音の検討はその後ということになります。

### 𡗗𡗗-𡗗𡗗度使について

吉池：劉浦江・康鵬(2014)によると、**𡗗𡗗**を単位とする文字連続は 30 例あります。

<sup>18</sup> 劉鳳翥(2010)「契丹小字《耶律宗教墓誌銘》考釋」『文史』2020(4)、劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編』70-79頁所収に、「契丹文字中經常用「度使」省稱「節度使」(73頁)とある。耶律宗教墓誌は漢文と契丹小字文が出土しており、漢文墓誌によると墓主の職歴に「故保義軍節度使」「判奉先軍節度使」とあり、契丹小字文の墓主事績部分には**𡗗𡗗-𡗗𡗗**(奴使)とあるので、度使は節度使の省略としてよいのであろう。

<sup>19</sup> 日本漢字音には節度使(セツドシ)と付度(ソソタク)がありドは去声で、タクは入声。『蒙古字韻』(1308年序)の五魚韻の去声に𡗗𡗗(パスパ文字は左に90度倒したもの) **tu**があり、十蕭韻の入声に𡗗𡗗 **tav**がある。現代北京語には度に2音があり、“節度使”**jiédùshǐ**の**dù**は去声、“揣度”**chuáiduó**の**duó**は入声に由来する音とされる。

<sup>20</sup> 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

中村：劉浦江・康鵬(2014)は、文献の模写および活字に拠ったもので、拓本には拠っていないので、字形が実際にどの様であるかについて拓本で確認する必要がありますね。

吉池：拓本によると次のとおりです。拓本は、注記したもの以外は劉鳳翥(2014)所収によりました。度使という読みは、劉鳳翥(2014)所収の模写に付された傍訳によりました。

なお吳英喆(2007)は、令欠-乂𠂔度使を令𠂔-乂𠂔とするのは誤りとします。欠であるか𠂔であるかが問題となるわけです。欠と𠂔の上部の違いが不明瞭な場合があり、そのような場合は、下部が「人」であるか「八」であるかによりました<sup>21</sup>。

耶律宗教墓誌(1053年)：11-1 令欠-乂𠂔度使 11-14 令欠-乂𠂔度使 11-26 令欠-乂𠂔度使  
11-30 令欠-乂𠂔度使

蕭令公(蕭高寧・富留太師)墓誌(1057年)：17-10 令欠-𠂔度使 19-7 令欠-𠂔度使  
20-16 令欠-𠂔度使

耶律仁先墓誌(1072年)：7-23 令欠-乂𠂔度使 9-65 令?-乂?度使 57-71 (ナシ)

韓高十墓誌(1076年以降)：18-14 令欠-乂𠂔度使 19-22 令欠-乂𠂔度使 20-10 令欠-??度使  
22-25 令欠 or 令𠂔-乂𠂔度使 23-8 令欠-乂𠂔度使

蕭特每夫人韓氏墓誌(1078年)：3-20 令欠-乂𠂔度使

耶律永寧郎君墓誌(1088年)：12-8 令欠-乂𠂔度使 16-21 令欠-乂𠂔度使

蕭太山與永清公墓誌(1095年)：8-29 令欠-𠂔度使

室魯太師墓誌(1100年)：8-1 令欠 (未読)

耶律(韓)迪烈墓誌(1101年)：8-8 令欠-乂𠂔度使 21-9 令欠-乂𠂔度使

耶律副署墓誌(1102年)：10-13 令欠-乂𠂔度使 17-18 令欠-乂𠂔度使

許王墓誌(1105年)：6-14 令欠-乂𠂔度使 7-16 令?-乂?度使 \*拓本は『契丹小字研究』(1985)に拠る

梁國王墓誌(1107年)：9-2?欠-?𠂔度使

金代博州墓誌(1170年)：47-17 令欠 (未読)

蕭居士(尚食局使蕭公)墓誌(1175年)：4-42?欠-?𠂔度使 5-36 令欠-??度使

中村：単独で令欠とし漢語の読みが付されていないものが2例。令欠の存否が確認できないものが1例。それ以外の27例は令欠-乂𠂔度使あるいは令欠-𠂔度使ですね。

ところで、上の例によると令𠂔-乂𠂔度使とし得るものは無いようです。吳英喆(2007)は、令𠂔-乂𠂔度使とするのは誤りだと述べるわけですがこれは何による発言でしょう。

#### 令𠂔-乂𠂔の𠂔

<sup>21</sup> 具体的には「左線が長く右線が短く、なおかつ短い右線が左線に接触しているか或は近づいている」ものは欠とした。

吉池：先に挙げた耶律（韓）迪烈墓誌(1101年)には、**令欠-ㄨㄨ**が2例あり、それぞれ8-8 **令欠-ㄨㄨ**度使と21-9 **令欠 (?ㄨ) -ㄨㄨ**度使であり、拓本によると2例ともに**欠**です。もっとも、21-9 **令欠**の**欠**は下部の二本線がやや離れており**ㄨ**に見えないこともないのですが、全体の形から**欠**とするのが自然です。

しかし、この墓誌を早い時期に紹介した唐彩蘭・劉鳳翥・康立君(2002)<sup>22</sup>は、8-8を**令欠**都護-**ㄨㄨ**使とし、21-9の方は**令ㄨ**度-**ㄨㄨ**使として、両者を区別します。もっとも著者の一人である劉鳳翥氏は、後の劉鳳翥(2014)において、8-8も21-9も、ともに**令欠-ㄨㄨ**度使と修正します。

中村：『契丹小字研究』(1985)は、借用漢語の表記によって**ㄨ**をuとしますが、**欠**の推定音はありません。そこで、唐彩蘭・劉鳳翥・康立君(2002)は度の近世音がtuであるからには、度の表記は**令ㄨ du**がふさわしいとの思い込みにより、21-9が**令ㄨ**に見えたのでしょう。それに対して、8-8の方は明らかに**欠**であったため**令欠**とせざるを得なかった。そこで**欠**を護xu<sup>23</sup>と読んで、**令(都)欠(護) -ㄨㄨ**使としたのでしょう。**欠**を護xuするからには根拠が必要ですが、おそらく『契丹小字研究』(1985)以降において、何らかの研究がなされたのでしょう。そのあたりの事情はどのようになっているか興味深いところです。

吉池：その点を検討する前に、劉浦江・康鵬(2014)によって**令ㄨ**という文字連続が有るかどうか確認すると、**令ㄨ**は一例のみです。耶律迪烈墓誌(1092年)の12行の16字目に出きます。もっとも拓本によると**欠ㄨ**ではなく“明らか”に**令欠**ですから、12-16は**令欠-ㄨㄨ**度使ということになります。早い時期にこの墓誌を紹介した盧迎紅・周峰(2000)<sup>24</sup>は、**令ㄨ**度-**ㄨㄨ**使としました。これも文脈から度使の度であるからには**令ㄨ**に違いないとする思い込みによるものでしょう。なお、劉浦江・康鵬(2014)にみえる**令ㄨ**の一例は、盧迎紅・周峰(2000)にある模写によって採録したものです。呉英喆(2007)が**令欠-ㄨㄨ**度使を**令ㄨ-ㄨㄨ**とするのは誤りと述べたのはこのような事情を指したのでしょう。

中村：そもそも**令ㄨ**を単位とする文字連続は無いということですね。それでは**欠**の音について検討しましょう。

### 欠の音を推定するための漢字訳語 ―その1

吉池：呉英喆(2007)は、耶律仁先墓誌の**伏ㄨ**が、契丹語の人名の涅魯古に相当するという

<sup>22</sup> 唐彩蘭・劉鳳翥・康立君(2002)「契丹小字《韓敵烈墓誌銘》考釋」『民族語文』2002(6)、29-37頁。

<sup>23</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中國社會科學出版社の「護」の近世音。

<sup>24</sup> 盧迎紅・周峰(2000)「契丹小字《耶律迪烈墓誌銘》考釋」『民族語文』2000(1)、43-52頁。





などはないのでしょうか。

### 欠の音を推定するための漢字訳語 —その2

吉池：即實(2012)は、耶律仁先墓誌の漢文の「皇帝は、北辺の達打や朮不姑等の部族が侵すため、王（耶律仁先）を西北路招討使に任命し討伐に向かわせた」<sup>32</sup>、および『遼史・道宗本紀二』巻22の「五年春正月，阻卜叛，以晉王仁先爲西北路招討使，領禁軍討之」との記述が、耶律仁先墓誌の契丹小字文の39行と40行に対応するとします。なお阻卜は朮不姑に同じとします。

39 行：・・・朮-不 欠・・・一-十-伏 公 化 关-丞-朮 欠 不・・・

五年於 北西 面 ? 朮不姑之

【五年に・・・北西面?-朮不姑の】

40 行：・・・一-十-伏 公 安-朮-朮-兩 弱-重 竿-業 及 子 朮 不・・・

北西 面 招 討 都 統 拜

【北西面の招討都統を拜す】

中村：漢文の朮不姑という民族名が契丹文の朮欠に対応するという読みですね。朮の中古音には入声術韻の澄母と入声術韻の船母の2音があり、漢字訳語の朮不姑の朮は澄母に由来するもので  $\text{ʃu}$  に近い音でしょう<sup>33</sup>。朮は借用漢語との対応より  $\text{ʃ}$ ,  $\text{ʃ}^h$  (又は  $\text{dʒ}$ ,  $\text{ʃ}$ ) とされているので<sup>34</sup>、漢字訳語の朮と朮の対応に問題はありません。欠の音については第5回目対談の吉池孝一・中村雅之(2020e)<sup>35</sup>で言及しました。王弘力(1986)<sup>36</sup>が、蕭仲恭墓誌第2行目の欠(祖)-不(父)-公 金 当(特免)-令 欠 不 朮(撻不也)-丞(大)-杰(王)の<sup>37</sup>、令 欠 不 朮を toboji (蒙古語 toboi “超群、傑出”)と読んで以降、欠は bo もしくは bu とされています。漢字訳語の不と欠の対応に問題はありません。そうすると漢字訳語の姑(楊耐思(1981)『中原音韻音系』は ku)と欠と対応させ、欠を gu とすることができます。

<sup>32</sup> 「皇上以北鄙達打、朮不姑等部族寇邊，命王爲西北路招討使往討之。」

<sup>33</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』は  $\text{ju}$  とするが、『蒙古字韻』には  $\text{ju}$  とある。『蒙古字韻』により  $\text{ju}$  とした。

<sup>34</sup> 『契丹小字研究』(1985)は  $\text{ʃ}$  (本対談の  $\text{ʃ}^h$  に相当する)、清格爾泰(2002)は  $\text{ʃ}$ ,  $\text{ʃ}^h$  (本対談の  $\text{ʃ}^h$  に相当する)とする。

<sup>35</sup> 吉池孝一、中村雅之(2020e)「漢語近世音と契丹文字漢字音(5) —契丹小字の入声表記、業・十・立・臘・筆の韻尾—」、『KOTONOHA』213、1-18頁。

<sup>36</sup> 王弘力(1986)「契丹小字墓誌研究」『民族語文』1986年第4期、56-70頁。陳乃雄・包聯群(2005)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：內蒙古人民出版社、418-445頁所収。

<sup>37</sup> 『金史』巻82「蕭仲恭傳」に「祖撻不也，仕遼爲樞密使守司徒，封蘭陵郡王。」とあり、『遼史』巻98「蕭兀納傳」に「蕭兀納，一名撻不也，字特免，六院部人。……帝嘉其忠，封蘭陵郡王」とあることより、公 金 当(特免)-令 欠 不 朮(撻不也)とする。

吉池：さきに人名の涅魯古（涅里骨）に対応する伏ネ（**𡗗**）欠の欠について保留としましたが、欠を gu とするならば、訳語の古や骨と合います。

中村：呉英喆(2007)が述べるように、**𡗗**-**𡗗**で表記される度使の度に入声韻尾 k に相当する破裂音があることは認めていいのでしょうか。

つぎに**𡗗**-**𡗗**度使の**𡗗**を検討しましょう。呉英喆(2007)では、**𡗗**-**𡗗**度使とする出典が示されないので、劉浦江・康鵬(2014)の語彙索引に拠って資料の出典と数量などを確認しましょう。音の検討はその後ということになります。

### 𡗗-𡗗度使について

吉池：劉浦江・康鵬(2014)によると、**𡗗**を単位とする文字連続は4例あります。拓本で字形を確認すると次のとおりです。拓本は劉鳳翥(2014)所収の拓本によりました。度使という読みは、劉鳳翥(2014)所収の模写に付された傍訳によりました。

蕭圖古辞墓誌（1068年）：9-32 **𡗗**-**𡗗**度使 10-10 **𡗗**-**𡗗**度使

耶律迪烈墓誌（1092年）：25-21 **𡗗**-**𡗗**度使 32-37 **𡗗**（未読）

中村：単独で**𡗗**とし漢語の読みが付されていないものが1例、**𡗗**-**𡗗**度使のように**𡗗**の字形が不明瞭なものが1例、明らかに**𡗗**-**𡗗**度使とし得るものが2例ですね。

ところで、呉英喆(2007)は**𡗗**-**𡗗**と**𡗗**-**𡗗**がともに漢語の度使を表記するという事より、欠と**𡗗**の“交代”が見られるとします<sup>38</sup>。しかし、一方が韻尾のある漢語の tak の表記を意図し、一方が韻尾の無い漢語の tu の表記を意図しているという可能性もあり、交代現象があるからといって完全な同音であるとは限りません。他に**𡗗**の音を知ることができる資料はないのでしょうか。

### 干支の丙（𡗗𡗗𡗗）

吉池：即實(1984)は、契丹語はモンゴル語や満洲語と同様に五色で甲乙、丙丁、戊己、庚辛、

---

<sup>38</sup>「契丹字**𡗗** **𡗗**表示“度使”之義。有的資料中記作**𡗗**【**𡗗**の誤植】 **𡗗**，説明**𡗗**和**𡗗**的讀音相近。」(28頁)。なお、呉英喆(2007)は28頁右において、道宗哀冊と宣懿哀冊の哀冊**𡗗**和**𡗗**-**𡗗**と太叔祖哀冊の哀冊**𡗗**和**𡗗**-**𡗗**の**𡗗**と**𡗗**が交代することより、**𡗗**と同様に**𡗗**もk音を有するとするが、本稿初頭「冊文の冊は**𡗗**」で確認したように、道宗哀冊と宣懿哀冊の**𡗗**は**𡗗**の誤であり、この例によって**𡗗**と**𡗗**の交代を議論することはできない。また、清格爾泰(2010)『清格爾泰文集 5』(496-497頁)は**𡗗** g~ge とするが、**𡗗**の音については第3回目対談の吉池孝一・中村雅之(2020c)「漢語近世音と契丹文字漢字音(3) —契丹小字の入声表記、僕・祿の韻尾—」『KOTONOHA』211、31-40頁で議論した。我々は、『契丹小字研究』(1985)が**𡗗** ai としたのと同様に、**𡗗**にgなどの破裂音は認めない。

壬癸の五つ表したとし、興宗哀冊の第1行目にある𐰺𐰽𐰾を月の干支の丙と読み、赤を表わすとしました<sup>39</sup>。契丹語の赤の音形については、『説郛・重編燕北録』の「赤娘子者、番語謂之掠胡奥」（掠胡奥を掠姑奥偌とする版本もある）により、漢語の赤娘子が掠胡奥（掠姑奥偌）に対応することを示し<sup>40</sup>、次いで『遼史・公主表』に婚礼の際に奥に座らせる尊敬すべき女子を奥姑と言う<sup>41</sup>とあることより、掠胡（掠姑）を赤、奥（奥偌）を娘子とし、𐰺𐰽𐰾に掠胡を対応させました。

中村：興宗哀冊は、ベルギーの宣教師 Kervyn 氏が 1922 年に発見し、筆写された図版が 1923 年に公表されたというものです。碑石も拓本もなく筆写には不正確な部分が含まれるとされていますが𐰺𐰽𐰾という字形を信頼していいのでしょうか。

吉池：劉浦江・康鵬(2014)によると、𐰺𐰽𐰾を単位とする文字連続は 2 例あります。なお字形は劉鳳翥(2014)所収の写真で確認しました。丙という読みは、劉鳳翥(2014)所収の模写に付された傍訳です。

興宗哀冊（1055 年）：1-11 𐰺𐰽𐰾丙<sup>42</sup>

博州防禦使墓誌（1170 年）：38-19 𐰺𐰽𐰾丙

<sup>39</sup> 早くは山路廣明(1956)『契丹製字の研究』東京：アジア・アフリカ言語研究室に議論がある。山路氏はモンゴル語と満洲語が、青と淡青で甲と乙を、赤と淡赤で丙と丁を、黄と淡黄で戊と己を、白と淡白で庚と辛を、黒と淡黒で壬と癸を表わすことを示し、契丹語も同様に色を用いて十干を表わしたと見るべきとした。なお、干支を用いて年月日の 3 種を表記し得るが、『遼史』は日の干支のみを利用し、年月の干支は出てこない。しかし漢文の哀冊や墓誌には年月日の干支が出てくる場合がある。したがって契丹文と漢文の両者がある場合、その両者を照らし合せて干支とその契丹語表記を決定することができる。それによると甲乙については同一の契丹語が対応する。この事実より、山路氏はそれぞれ二組の十干（甲乙、丙丁、戊己、庚辛、壬癸）は同一表記であると想定した。そして、甲乙、戊己、庚辛、壬癸の 4 種については、対応する漢文により契丹語形を決定した。残る 1 種の丙丁については、漢文を伴わない興宗哀冊第 1 行目の月の干支の𐰺𐰽𐰾をあてた。興宗哀冊第 1 行目の𐰺𐰽𐰾の読みについては変遷があり興味深い。まず羅福成(1934)「興宗皇帝哀冊文 羅福成釋文」（『遼陵石刻集録』（金毓黻編録）奉天圖書館）が「乙」と読み、次いで王靜如(1953)「契丹國字再釋」（『史語所集刊』5（4））、陳乃雄・包聯群編(2001)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：内蒙古人民出版社、74-80 頁所収）が「丁(?)」と読み、山路廣明(1956)に至って根拠を示して「丙・丁」とした。

<sup>40</sup> 早くは白鳥庫吉(1910-1913)「東胡民族考」『史學雜誌』21-24、(1970)『白鳥庫吉全集 4 塞外民族史研究 上』63-320 頁東京：岩波書店所収が、『遼史拾遺』所収「燕北録」の赤娘子を契丹語で掠胡とする記述により、赤色を掠とし娘子を胡とした。モンゴル語や満洲語の赤の音形との比較もここで行われている。

<sup>41</sup> 「凡婚燕之禮，推女子之可尊敬者坐於奥，謂之奥姑」（1000 頁）。

<sup>42</sup> 興宗哀冊の 1 行目に、𐰽（八）-𐰾（月）-𐰺𐰽𐰾（丙）-𐰽𐰾（戊）-𐰺𐰽𐰾（朔）-𐰽（四）-𐰽（日）-𐰽（己）-𐰽（丑）とある。対応する記述は『遼史・興宗三』に「二十四年……八月……。己丑，帝崩于行宮，年四十。」(247-248 頁)とある。

中村：興宗哀冊の他に博州防御使墓誌にも出てくるので𠂔𠂔余という字形を信頼していいの  
でしょう。『契丹小字研究』(1985)は、借用漢語との対応から、𠂔を l、𠂔を iao、余を ai と  
するので、𠂔𠂔余は liao.ai となります。即實(1984)はどのように読むのでしょうか。

吉池：fi を加え、liao'fiæ とする案を提示します。これは掠胡の胡や掠姑の姑が喉で調音す  
る子音をもつことを考慮してのことでしょう。2年後の王弘力(1986)は、「掠姑奥偌」により、  
赤を訳語の掠姑にあて𠂔𠂔余を əliaogə と読み余を eg としました<sup>43</sup>。

中村：余が有声摩擦音 fi を含んでいたか、それとも破裂音 g を含んでいたかという問題です  
が、破裂音 g としたほうが、議論が複雑になりませんね。

吉池：どういうことでしょうか。

中村：さきに、𠂔𠂔-𠂔𠂔と𠂔余-𠂔𠂔がともに漢語の度使を表記するということについて、一  
方の𠂔𠂔が韻尾のある漢語の tak の表記を意図し、一方の𠂔余が韻尾の無い漢語の tu の表記  
している可能性もあるので、このような原字の交代現象のみによって直ちに余に破裂音 g を  
認めるわけにはいかないとしました。しかし他の訳語の検討により、余が摩擦音 fi もしくは  
破裂音 g を含んでいたとなると事情はことなります。余は破裂音 g を含んでおり、𠂔𠂔も𠂔  
余も、ともに韻尾のある漢語の tak を表記し得る音であったため、交代が可能であったと理  
解することができます。以上によると、度使（節度使）の度は、旧音を保存する契丹漢字音  
として入声韻尾 k に相当する音を持っていたということですね。ただし、度使の度が破裂音  
g を含んでいたとしても、契丹漢字音として dag のような音であったかどうかは検討が必要  
です。

吉池：契丹漢字音は、契丹語の訛りや契丹語としての音変化を受けているので、母音がどの  
ようであったか難しいということですね。いずれにしても、節度使の度は、その表わす意味  
からは去声の音が期待されるけれども、契丹小字の表記では入声音を用いているというこ  
とになります。

中村：契丹人にとっては、伝統的に入声の度の方が去声よりも優勢だったので、意味にかか  
わらず入声音を用いたということでしょうか。日本漢字音でも類似の事例はあります。例え  
ば、「比較」の較は本来その意味からは去声であり「比校」と同様に「ヒコウ」と読むべき

<sup>43</sup> 「丙（丁）𠂔𠂔余 𠂔𠂔𠂔讀音爲 əliaogə “赤色”。據《燕北錄》載：“赤娘子者，番語謂  
之掠姑奥偌。”過去釋讀爲 liaoe，與“掠姑”不合，關鍵在最後一個字母的讀音。余應讀 eg」  
(65 頁)。余を ge でなく eg とするのはなぜか、特段の記述はない。

ですが、日本では入声の「カク」の方が優勢であったので、いつからか「ヒカク」と読むようになりました。契丹小字による度の漢字音もそのような例と考えることができるかも知れません。

吉池：今回はここまでとし、次回は呉英喆(2011)<sup>44</sup>を検討し入声韻尾の全体をまとめましょう。

---

<sup>44</sup> 呉英喆(2011)「再論契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『北方文化研究』2(1)、85-90頁。